

はじめに

日本の教師たちは、実によく学ぶ。自らの授業の設計・実施・評価をしっかりと吟味し、自校のカリキュラムをていねいに省察する。

教師たちは、誰かに強制されて、授業研究やカリキュラム開発にたずさわっているわけではない。彼らは、専門職としての使命を果たすために、日々、授業やカリキュラムについて、研鑽を積んでいる。その範囲は勤務時間外に及び、またその共同体も自主サークルなど校外の活動に広がっている。

けれども、教師たちの職能成長、とりわけ授業力量形成の最も基本的なフィールドは、「学校」である。所属校を舞台とする授業研究は、同じ子どもたちに対して繰り広げられている指導と評価を題材とする吟味であるから、教師間の意見交換が最も活発になるはずだ。学校のカリキュラムは、複数の教師による実践の集積によって構築されるものであるから、その開発に同僚間のコミュニケーションや共同が不可欠であることは、自明であろう。

教師たちは、所属校を単位とする授業研究やカリキュラム開発を通じて、授業実践を発展させるために必要な知識を獲得し、技術を向上させ、そして信念を精錬させていく。それは、新しい授業やカリキュラムへのチャレンジを各教師に促してくれるばかりか、同僚間のコミュニケーションや共同の必然性を高め、その関係性の再構築を生み出す。

けれども、残念ながら、あらゆる学校において、そのような理想的なサイクルが確立しているわけではない。多忙化等を理由に実践研究への従事を回避しようとする学校も存在する。今日、教師たちの実践研究への熱意には二極化現象が生じており、その傾向は、年

を追って強まるばかりだ。

実践研究に背を向けるとまではいかななくても、それが形式主義に陥っている学校も少なからず存在する。そうした学校では、例えば授業研究会を催しても、沈黙が座を支配していたり、授業を公開した教師への非難が延々と続いたりして、それが教師たちにとって、「学びの機会」となりえていない。

我が国の多くの教師たちは、自らの専門的成長に授業研究やカリキュラム開発が資すると考えているし、その機会の提供を切望している。にもかかわらず、それが実現しない学校が厳存する。なぜだろうか。どうすれば、教師たちが同僚と交わり、それを刺激や題材やリソースとして、自らの授業やカリキュラムに関する専門性を磨くことができるのか。

本書は、こうした問題に答えるために、上梓するものである。筆者は、日常的、継続的に、学校を訪れて教師たちの実践研究の営みを眺め、彼らと対話する中で、上述したような、学校を単位とする実践研究の可能性と課題を実感してきた。ある学校では、授業改善に挑戦し、同僚と意見交換を重ねて、生き生きと新しい授業の創造に取り組む教師たちに接してきた。一方で、ある学校では、同僚とのコミュニケーションや共同を忌避し、時代や状況が変わっているにもかかわらず、旧態依然とした授業スタイルに埋没している教師たちを目にしてきた。

教職の独自性、魅力は、授業やカリキュラムの創造にある。それを、実践研究の従事、とりわけ同僚との共同研究によって教師たちに実感してもらいたい。それを通じて、彼らに自己実現を遂げてもらいたい。本書の叙述は、このような願いに貫かれたものである。

同僚性を基盤とする実践研究の可能性を信じ、それへの期待を込めて、本書は、これまで「校内研修・研究」と呼ばれてきた取り組みを、あえて「学校研究」と呼ぶことにする。学校研究は、我が国の教師たちが推進してきた校内研修・研究の理想的な姿に他ならないが、それが必ずしも充実してこなかった点をかんがみ、本書では、読者に、その問題点の克服方法を提案したい。同時に、規制緩和や教育の情報化といった、今日の教育界の動向を踏まえて、そのリニューアルの必要性やあり方を訴えたい。

「学校研究」の可能性やあり方を読者に再認識してもらうために、また実感してもらうために、筆者は、本書に3つのパートを設けた。

第1部：学校研究の可能性は、いわゆる「理論編」である。ここでは、学校研究の意義、その歴史と現状、そして学校研究を継続・発展させるための術について語る。外国の学校改革と我が国の学校研究の異同、明治以来の学校研究の発展史を分析し、我が国の学校研究の背景を明らかにする。次いで、学校研究のテーマ・方法論・推進体制の現状、学校研究の診断・評価のための理法と技法を論じて、学校研究の「今」を浮き彫りにする。さらに、それらを踏まえて、学校研究の「要件」を呈する。

第2部：学校研究の企画・運営・評価は、いわば「モデル編」と言えよう。このパートでは、学校研究の理念を体現するための枠組みを「学校研究の歳時記」として示している。つまり、4月から3月の1年間、教師たちは学校研究を推進するためにいかなる活動に従事すべきか、そのコツやツボはなにかを筆者なりに整理する。読者には、第2部の12の章を「鏡」にして、自らが所属する学校の実践研究を点検・評価してもらいたい。

第3部：学校研究のすぐれた事例は、「実践編」である。読者に、

第1部および第2部の叙述をいっそう具体的に理解・把握してもらうために用意したパートである。この部では、筆者がここ数年、その実践研究を継続的に支援した学校のうち、学校研究の可能性を体現し、またその企画・運営・評価を進展させている、10校を紹介している。これらの学校の実践研究は、学校研究の「基本原則」を遵守している点において、共通項を持つ。と同時に、その力点の置き所やその具体的手法を異にしているという点で、独自性も示している。読者には、10校の学校研究ストーリーを読み比べてもらい、学校研究の「個性」も十分に感じてもらいたい。

これまでも、学校の実践研究に関する書物がなかったわけではない。学校研究の歴史を詳細に検討した学術書は少なくないし、その事例をレポートした書籍は数限りない。

けれども、本書のように、学校研究の理論と実践を連結させようとする著書は極めて希であった。類書には、筆者の大学および大学院時代の恩師たる水越敏行先生による『授業改造と学校研究の方法』（明治図書、1985年）があるが、この高著が出版されてから20年以上の歳月が流れている。それゆえ、学校研究をめぐる社会的状況にかなりの変化が生じている。筆者は、本書を執筆するにあたって、同書の内容を参考にしながら、学校研究の可能性やあり方をいっそう多元的に、また今日的に検討することを目指した。本書の意義は読者の判断に委ねるしかないが、読者、ことに学校現場の教師たちが学校研究の価値やシステムをあらためて問い、考える際に、本書がその一助になるならば、幸甚である。

ところで、本書は、株式会社・ぎょうせいの月刊教育雑誌『悠』に筆者が平成16年4月から同17年3月までに連載した「教師が磨

き合う学校研究」 ～ を，大幅に加筆したものである（実は，先に紹介した『授業改造と学校研究の方法』も，水越先生が『悠』に連載した内容を修正加筆なされたものである。浅からぬ縁に少なからず驚かされる）。

この連載では，筆者は，学校研究の手続き等を，各号2頁の制約の中で解説したり，提案したりした。本書の内容では，第2部に該当する。ぎょうせいのご厚意により単行本化の運びとなり，連載では紙幅の都合上十分には述べられなかった学校研究の理論や事例に，本書では相当数の頁を費やすことができた（本書の第1部および第3部）。もちろん，連載の内容とほぼ同じ構成になっている本書第2部についても，先達の知見をひもといたり，事例を加えたりして，学校研究の企画・運営・評価に関する筆者の主張がいっそう明確になるように，心がけた。

しかし，大幅な加筆ゆえに，連載で提案した内容を単行本にまとめるにあたって，かなりの時間を要した。連載終了から単行本の原稿を脱稿するまでに1年弱もかかり，編集をご担当いただいた，ぎょうせい・『悠』編集部の齋藤健治氏には，多大なるご迷惑をおかけした。なかなか執筆のペースがあがらぬ筆者を温かく見守ってくださった同氏に，心より感謝申し上げる。

このような経緯で誕生した本書，『教師が磨き合う学校研究』を，子どものために，同僚と授業研究やカリキュラム開発に挑戦し続ける，すべての学校，教師に捧げたい。